山内清男『論文集』・『博士論文』刊行とその後

岡　本　東　三

はじめに

『図録』において山内清男資料の顛末について述べた。今回は『先史考古学論文集』刊行に至る山内の想いと、山内没後の『日本先史土器の縄紋』出版をめぐる事情について記しておきたい。遺された山内資料は、遺物・蔵書・写真などの物質的な「モノ資料」。それに対し會津八一記念博物館に寄贈された著作原稿・草稿類・発掘記録・手帳・書簡類は、山内の精神が宿る「ココロザシ資料」である。両資料が公開された時、はじめて総体としての山内清男の実像と方法論が浮かび上がってくる。

一つの窓からみえる風景も、人によっては異なった風情に映る。また内側からみた景色と外側から景色も違うものである。しかし山内がめざした先史考古学は、今や著作から学ぶしかないのだ。山内の「ココロザシ」は自身の死によって、「山内清男全集」としては完結に至ることはなかった。更に継承した佐藤の死によって中断する。その後『日本先史土器の縄紋』は刊行されたが、『論文集』と対をなす『日本先史時代図録と研究』は未完のままになっている。いずれにしても「遺されたモノ」が、継承しなければならない課題は大きい。

1．先史考古学論文集の方針

山内の晩年1967年、集大成ともいえる『論文集』の自費出版を敢行した。その出版計画が『日本先史土器図譜』解説編の表紙と裏表紙の裏に記されている［**資料１**］。まずはその刊行計画からみてみよう。『論文集』は全五巻から構成され、あわせて『日本先史時代図録と研究』のアトラスからなる。戦前の『日本遠古之文化』と『日本先史土器図譜』の総集版ともいえる構想である。

第一巻は「日本遠古之文化」（第１冊）をはじめとして逐次刊行された戦前の著作（第１～５冊）と戦後東大在職中の著作（旧第11集）を含めた構成になっている。第二巻は『日本先史土器図譜』（第６～10冊）と「吉胡貝塚第二地点」から構成される。しかし「吉胡貝塚第二地点」（旧第12・13集）は予告されるものの刊行されていない。第三巻は京都大学に提出した学位論文『日本先史土器の縄紋』の出版である。生前から山内自身の手で準備されていたが、没後の1979年に刊行される。それについては後述する。第四巻は戦前に記した「日本先史時代概説」の依頼原稿、一つは岡書院、もう一つが翰林書房から出版予定のもの。後者は「ミネルヴァ」創刊号、裏表紙に『日本原始文化』として予告されている［**文末 A**］。「その他にも書きかけの原稿が沢山ある」とされる未発表論文の刊行である。第五巻は東大定年後の著作（新第１～５集）である。新第４・５集は山内没後に刊行されたものである。また予告には新第６集として「山内先生と語る」、別巻１「矢柄研磨器について」、別巻２「草創期の諸問題」が準備されたが、刊行に至っていない。

『論文集』全五巻の計画とともに、構想されたのが『日本先史時代図録と研究』の刊行である。その予告（1968年４月創刊予定）によると「隔月刊・図版等図示多数。十万枚の写真を駆使して日本先史時代を順次縦横に解明

山内清男・先史考古学論文集今後の計画

第一巻　従来この論文集は分冊刊行し会員に頒布して参りましたが主として戦前執筆の論稿

⑴　日本遠古之文化他一緩
⑵　縄紋早前期の研究報告
⑶　縄紋晩期に関する給文及詮争
⑷　原始農業及び弥生式に関する論文報告
⑸　縄紋式の技術風習等に関するもの

合計三十二篇を収載致しました。これにあと数篇を加えた一冊（論文集 13 冊に予定）を追加し，目次索引を付して第一巻に合冊したい希望を持って居ります。

第二巻　日本先史土器図諮は図版を中心としたものであって，上記各論文集と趣を異にして居ります。このため論文集は 6 ～ 10 冊合冊と云う非常手段をとりました。今春広告しました吉胡貝堀第二地点も図版が多くなるべく原形を損はない様に再刊を期して居ます。コロクイプ 24 頁本文中凸版十数頁活字印刷頁約二十頁これを従来の論文集 2 冊分（第十一，十二 ffi）として来る二・三月には上梓し得ると考えます。そして日本先史土器図詔と共に第二巻に組み入れたいと考えて居ります。

第三巻　京都大学に提出した学位論文「日本先史土器の縄紋」は図版 200 頁以上本文 200 枚の分量があり出版に困難が多大と考えられますが，各位の上記各冊に示された好意にすがって，自らの手で出版したいと考えて居ります。成案を得たあかつきには改めて御援助をあおぎたいと思います。

第四巻　私は中谷治宇二郎氏が日本石器時代捉要を著した前から日本先史学の概説の執筆をつづけ岡書院坂口保治氏のしようようもあり一通りの記述したことがあった。完成はして居ないが大部なものである。第二回目に一篇の概説の計画したのは昭和十年頃，甲野勇氏の依頼によって日本原始文化として発表される筈で原稿も九分通り出来て居り，図版類の製版も始まった次第であった。原稿の完成が延引したのも悪かったが当の甲野氏のこしくだけも原因であった。論文集第四冊に出した第十九「日本に於ける農業の起原」はこの末刊概説を転用して某かの稿料を得たのであった。その他にも書きかけの原稿が沢山ある。これらの中から第四巻を作りたいと思って居る。元々私は論文集を出すのは最早学問的に行きづまり，旧作を陳列するのは窮余の策だと思って居たし，今でも思っている。気が向いたらの話である。

第五巻　ここ十数年の学問の変転は著しいものだった。私は日本先史時代の体系を第一に考えて居たために，難しい幾多の問題が出現したが，ここ五年間にそのすべては自分なりに解決することが出来た。この時期の自分の作品も漸次集積して行きたい。これを五巻としようと思っている。

以上のうち第一巻と第二巻は完成間ぎわであり，既定計画完了寸前であることを示して居る。この際次の緊急な出版計画を皆様にお伝えし，従来にもます御援助を賜りたいと考えます。

山内清男編輯

日　本　先　史　時　代

図　録　と　研　究

1968 年 4 月創刊予定

隔月刊・図版等図示多数・本文充実。十万枚の写真を駆使して日本先史時代を順次縦横に解明する。先史遺物特に土器写真恵送を乞う。
（会員制・三冊分会費 1000 円程度の予定・葉書で申込まれたい）

資料 1　『論文集』の刊行計画

する。先史遺物特に土器写真恵送を乞う」と記す。著作集とともに図録集が重要な研究成果の大きなの柱であることが判る。

戦前の『日本先史土器図譜』第一期十二輯（1939～41年）の刊行に続き、第二期十二輯の計画が準備されている［**文末 B**］。その予告には早期の標識資料の一つとして、稲荷台式が準備されている。戦後の「草創期」提唱に関連して注意する必要があろう。しかし、戦時下における用紙（三菱アイボリー紙）の入手困難、印刷機の供出、仙台疎開中の乾板及び用紙等の焼失によりその出版を断念せざる状況に追い込まれる。

こうした失意にも関わらず、山内は戦後も弛むことなく多くの人々の協力を得て先史遺物の写真焼付けを日課のように継続されたのである。それが木製キャビネットに収められた膨大な「山内写真資料」である。山内自身も十万枚の写真と豪語するように『日本先史時代図録と研究』への永年にわたる構想が、ようやく結実を迎えようとしていたのである。しかし刊行の前、山内の死によって中断する。無念のことであった。以上のように、山内がめざした『論文集』全五巻と『図録』は未完のままに終わっている。

なお1997年、示人社により『山内清男先史考古学論文集』全４巻が復刻されている。第１巻が『論文集』第１～５冊・旧第11集 、第２巻が『論文集』新第１～５集・雑誌「先史考古学」・「矢柄研磨器について」・「草創期の諸問題」、第３巻が『日本先史土器図譜』、第４巻が『日本先史土器の縄紋』の構成となっている。定価十万五千円。とても個人では入手できる値段ではない。『日本先史土器の縄紋』には新たに英文目次・要旨〔西田泰民訳〕が付されている。この復刻版は坪井清足の尽力によるものであるが、山内自身が計した『論文集』の方針とは異なる構成となっている。

今後、山内資料の整理・出版にあたっては、この山内の方針に留意する必要があろう。

2．『博士論文』出版の事情

佐藤達夫が亡くなった後、起こった大きな出来事の一つは『日本先史土器の縄紋』の出版である。この間の出版に至る出来事については、岡本は奈良におり詳しい事情はよく判らない。しかし御遺族の山内ひみ子、身近におられた戸田哲也からの聞き取りや『日本先史土器の縄紋』の例言、大村 裕の著作〔大村1993、2008、2014〕から出版の事情や経緯を探ることができる。

先にも述べたように、本来この博士論文は山内自身が『論文集』第三巻として予定していたものである。これに関連した草稿類は出版準備のため自宅で保管されていた。柏屋印刷所塚田 光の積算によると出版費（六百万円）、それは『論文集』を売上げた資金では到底、賄えるような額ではなかったのである。戦前のパピルス書院と同様、自転車操業のなかで頓挫する。山内の死後は佐藤に引き継がれ、いずれ編集される予定であった。後に『日本先史土器の縄紋』の編集に携わる渡辺兼庸は、旧知の佐藤達夫著作集〔1978『日本の先史文化』〕にも関わり、その事情は充分に承知していたはずである。ともあれ佐藤没後二年を経った1979年、塚田と渡辺の編集によって記念すべき『日本先史土器の縄紋』が刊行されることになる。この山内の縄紋原体研究は先史考古学の筋金であり、「日本考古学が世界に誇るべき劃期的な業績」であった〔芹沢1980〕。博士論文はその業績に相応しい帙にはいった立派な装丁の『日本先史土器の縄紋』として出版されたのである。その例言には、塚田は「本書は山内清子氏の要請をうけて編集した」と記す。一方、清子夫人の跋には「塚田光様から、そろそろいかがですかとお申出をいただき、私どもの気持ちも決まりまして、全面的にお任せすることにいたしました」と依頼の経緯と謝意を述べている。おそらく塚田が出版を申し入れ、御遺族が応じたというのが事実であろう。

博士論文の出版は、この機を逃しては日の目をみることはなかったのは確かである。塚田の苦労と尽力は多とするところであるが、なぜ塚田は経済的リスクの伴う『日本先史土器の縄紋』の出版に踏み切ったのであろうか。それは正に博士論文が縄紋学の真髄であり、一子相伝のような継承された「秘伝書」の公刊は、研究者としても編集者としても名誉ある意義深い仕事と考えたからに他ならない。しかし『論文集』に当初から関わり出版方針を熟知していた塚田であれば、山内存命中にもその願いを叶えることができたはずである。しかし出版された『日本先史土器の縄紋』は山内の「ココロザシ」とは切り離され、独立した豪華な単行本として出版された。失礼を顧みずにいうならば、この出版の完成をもって柏屋印刷所としての「塚田」の仕事は終わっていたはずである。定価一万円、1,000部をあっという間に売り尽くし、心配した莫大な出版資金は回収できた。山内の「武家の商法」に較べ、塚田の商才は長けていたのである。さらに刊行後も編集者としての「塚田」は、山内の代理人の如く振る舞われるのである〔塚田 1980a.b〕。

3．山内清男の原体解明とその伝え聞き

山内が縄紋の謎を解いたのであろうか。芹沢長介が述べているように、1932年『ドルメン』掲載の「日本遠古之文化」に暗示的に述べるに過ぎない〔ドルメン1-5、1-9〕。回転縄紋であることを明確に記したのは1939年『日本遠古之文化』補注付・新版の補注38である **[資料2a]**。戦後に至って1961年博士論文『日本先史土器の縄紋』の中で、はじめて「昭和６年偶然の機会」に回転縄紋であることを発見したと語った〔山内 1976〕。同様の趣旨は『日本原始美術』でも述べられている〔山内 1964〕**[資料2b、c]**。

甲野 勇・酒詰仲男・斎藤 忠・佐藤達雄・伊東信雄が語る「発見の経緯」も、おそらく山内からの伝聞であろう〔甲野 1953、酒詰 1967、斎藤 1974、佐藤 1974、伊東 1983〕**[資料3a～e]**。なお佐藤は山内から直接聞いた「発見の真実」を改めて学史に留めたのである。

a．1939『日本遠古之文化』補注付き新版［補注38］

縄紋の原体が何であるかに就ては色々の意見があったが、自分の研究によりこれは凡て縄又軸に縄を巻いたもの等であることが判明した。押捺の方法には原体の側面を押す場合と、廻転しつつ全面を押捺する場合がある。後者の場合が最も普通に見られるものであって、原体が縄であれば斜行する縄紋を生じ、或は軸に縄を巻いたものである時には、撚糸を並べ押した如くに見えるもの、網目状のものその他の圧痕を生ずるのである。これらの廻転圧痕が織物、布目、袋、蓆或は網自体の圧痕と誤解されて居たのである。今日ではこれは殆ど常識となって居って、当時自分の研究に文句を付けた連中も鳴りをひそめた様な形である。今尚聞くことは凡ての縄紋が側面又は廻転圧痕で作られたのではあるまい、中には何か平らなものの圧痕があるだろう等と云う繰言であって、これは負け惜み又は良く云って老婆心と云う奴であろう。然し万一縄紋と云われるもののうちに平らなものの例えば布や蓆である明白な例があるならば自分はこれらを縄紋とは云わない、別のものとすれば良いのである。縄紋の変化、原体の構成、押捺手法の変化に就ての研究は数年前に完了し、大部の原稿を所有して居るが、未だ発表すべき良き機会を得ていない。

b．1964『日本原始美術』縄文土器

偶然、昭和６年斜縄紋は縄を回転して押捺したものであることを発見した。従来は幾多の学者が、平面または立体いずれにせよ、両面を有する繊維製品を考えていたところであった。正にわが石器時代人によって裏をかかれてた次第である。一旦回転という意外な技法が判明してから縄紋の秘密は急速に解明された。一旦回転という意外な技法が判明したから縄紋の秘密は急速に解明された。

c．1979〔1961〕『日本先史土器の縄紋』

昭和６年偶然の機会から、回転押捺によって縄が斜行縄紋を作り、軸に縄を巻絡したものが撚糸紋を作るということを知り、その時までに収集してあった縄紋の種類は大半実験的に作り得る様になった。

資料２　山内清男の原体解明の記述

a．甲野　勇 1953『縄文土器はなし

「とうとう縄文の正体をつきとめたよ」これが、山内氏の最初の言葉でした。そして、ポケットからひと握りの油土と、一本の撚紐とをとり出しました。それから机のうえに油土をおいて平らにのばし、そのうえに撚紐をのせ、これを手のひらで軽くおさえながら前の方に動かすと、紐がころがり動いて油土のうえに、くっきりとつけた跡が、まがうかたなき縄文でした。〈中略〉山内氏は、この発見の動機を話してくれました。いつも気になって、頭からはなれない縄文の謎を解こうと、山内さんは、その日も研究室の片すみで、油土の塊りを片手に、土器に現れた、いろいろな縄文の型をとって調べてみました。さすがに、ちょっと疲れたのでしょう。山内さんは、煙草に火をつけて、ゆっくり吸いながら、なにげなく側らにころがっていた螺線をとりあげこれを油土にの表面に手のひらで転がしたのです。

こんな時でも、山内さんの目は、平らにのばされた油土の表面に、連続して印された線のあと見逃しませんでした。はっとして螺線を調べると、ぐるぐると曲っている線と、油土に残された平行線とは全く一致していました。これだとばかり、こんどはよった細紐を、同線にして押してみたところが、まごうかたなき縄文が現れたのです。

b．酒詰仲男 1964『貝塚に学ぶ』

山内が東北大学の長谷部教授研究室にいるとき、油粘土の上に偶然紙撚をころがしたのである。そのときに、石器時代の土器の表面についているのと同じ廻転印刻がついているのを見て、かれ自身びっくりしたのである。その日、その時以来、かれはこの紙撚の陰刻のとりことなった。

c．斎藤　忠 1974「山内さんを憶う」『山内清男集』付録

山内さんが、縄文式土器の縄文技法について、絡縄を原体として廻転押捺したことによると考えたことは研究史の上に残る大きな業績であることはいうまでもない。この考えが、いつ頃から山内さんに発想されたかは問題であり、またこれにともなって、いろいろな伝説すら伝えられている。しかし、私にとっては一つの追憶がある。それは、私が仙台にいた頃、山内さんが私の家に遊びにこられ、すぐに油粘土をもってこさせ、紙撚りをつくり、油粘土の上に巧みな手つきで押しつつ廻転させ、縄文を再現させたことである。私は、この有様をみとれて驚嘆したことがある。山内さんもまた誇らしげに「斎藤さん、どうですか」といいながら説明してくれた。

d．佐藤達夫 1974「学史上における山内清男の業績」『山内清男集』

昭和６（1931）年偶然の機会に斜行縄紋が撚り紐の廻転圧痕であることを発見された。ある日いつものように、机の上に油粘土と撚り紐をのせて工夫していたが、どうしても斜行縄紋を作ることができない。そのうち疲れて眠ってしまった。目が覚めてみると、なんと粘土の上に立派な縄紋がついていた。そこにあるものといえば撚り紐しかない。従ってそれが粘土上の縄紋の原体であることに間違いはない。そこからついに原体の廻転に気付かれたのだそうである。たぶん眠り込んだひょうしに手が撚り紐を転がしたのだろうといわれていた。この発見にひどく興奮された由であるが、まことにもっともなとと思われる。この場の情景は名画のシーン見る思いがする。根をつめた工夫の後の発見であって、これはもう偶然といえない問題であろう。

e．伊東信雄 1982「回想仙台の考古学」『仙台郷土研究』第６巻３号

山内氏がどういう具合にしてそれを見つけたか。山内氏は当時医学部の解剖学教室の助手をしていましたから、そばにはいろいろな医者の道具があるわけです。ある日綿棒という、よく耳鼻科の病院にいくと耳を掃除したり鼻を掃除するあの、脱脂綿を付ける細い金属の棒がありま、あの棒をゴム粘土のうえに回しました。そうすると綿棒の先は綿がはずれないように螺線になっておる、その棒の螺線部分をゴム粘土の上で回転してみると何だか縄文に似たような文様ができる。ちょうど縄をころがしたような文様になる。そこで目の前にあった窓のカーテンの房の紐を粘土に転がしてみた。そうすると縄文と全く同じものができた。そこでこれは縄を転がして付けたものでないか、そう気が付いて、それから麻を買ってきて、一生懸命になっていろいろな縄文をこしらえた。それをゴム粘土の上で転がしてみる。その撚り方によっていろいろな縄文が出てくる。縄文の違いはみな縄の撚り方の違いによるもので、〈縄の撚り方によるもので〉あるということがわかったのであります。

資料３　各氏の聞き書き

４．芹沢長介・小林達雄の疑義とW. E. ニコルソン報告

この縄紋原体研究の原点ともいうべき発見に、疑義を呈したのは芹沢長介である〔芹沢 1975〕**［資料４］**。さらに芹沢は『日本先史土器の縄紋』の翌年、その新刊紹介の中で再び疑義の詳細を明らかにする〔芹沢 1980〕。それはイギリスの専門誌“MAN”1929年３月号に掲載された「W. E. ニコルソン報告」が「山内の発見」につながったのではないかという疑義である。この芹沢の疑義は『夏島貝塚報告』〔1957や『日本考古学辞典』〔1962〕で「縄紋施文技法」を許可なく無断使用したと山内が批判したことへのいわば意趣返しのようなものである。この芹沢の疑義に小林達雄が直ぐさま賛同を示し、後に詳しくコメントしている〔小林 1978、2018〕**［資料５］**。芹沢・小林といえば、戦後を代表する石器時代の研究者である。こうした両氏の言い様をみても、学界や学史における「山内の立ち位置」を象徴しているようにみえる。

この芹沢の書評に対し、真っ向から反論したのが編集者であった塚田である〔塚田 1980b〕。塚田は芹沢が指摘した「W. E. ニコルソン報告」の引用について書誌的誤謬を論い、原典に当たっていないのではないかとも疑っている。芹沢が「W. E. ニコルソン報告」をいつ知ったのか、偶然なのか、はたまた誰かの示唆によるものか、そのことを詮索するレベルの話である。ややもすると泥仕合を呈し後味が悪い。「ニュートンのリンゴ」から万有引力を発見した逸話を疑っても余り意味のないことである。また小林が指摘するように、欧米の事情に精通していた山内であれば、おそらく「W. E. ニコルソン報告」にも目を通していたに違いない。事実、三貫地貝塚の網様撚糸紋〔1929〕や回転押型紋〔1964〕の記述には“MAN”からの引用がみられる。後者の回転押型紋については、小林行雄がすでに紹介〔小林 1934〕していることをあわせて記す。

芹沢が「撚紐」と訳し、小林が「縄」と呼んだ“string”の正体は、縄紋原体とは似て非なるバオバブの種を数珠繋ぎした紐である**［資料６ Fig. ３］**。誰が縄紋原体を想像することができようか。佐藤達夫も芹沢の嫌疑を知っていたが、岡本の問いに「W.E. ニコルソン報告をみても判りませんよ」とひと言と語った。「原典」に当たれという事であろう。芹沢の嫌疑は「縄紋が回転施文であると教わった」世代の後知恵に過ぎない。そもそも、「W. E. ニ

a．1975『縄文』陶磁大系１平凡社

縄文の原体、縄文の施紋法、などについてもっとも熱心に研究を続けたのは山内清男であった。山内は数年間の研究の結果、ついに縄文の秘密－撚紐の回転押捺というきわめて簡単な操作によってみごとな縄文がうまれる事実を探知したといわれている。しかし山内が撚紐による回転施文にはじめて気づいたのがいつなのかは明らかではない。ただ、回転手法を暗にほのめかし、従来の編織物圧痕説を否定しはじめたのは、雑誌『ドルメン』に「日本遠古の文化」を連載した一九三二年の八月以降であり、ニコルソンの報告より三年ほど後のことになる。山内がニコルソンの文章を読んでヒントをえたのか、あるいはまったく独自に回転手法を考案したのか、私にはどちらとも判断はできない。しかし、この手法の先取権はが問題になるとすれば、やはりニコルソンの側にあることだけは確かであろう。

b．1980「山内清男著『日本先史土器の縄紋』」考古学雑誌66－1

その秘密は、ひとたび知ってしまえば何でもない事だが、博士がいつ、どこで、どういう理由によって「偶然に」発見したのかということは、永久に謎として残されることかもしれない。すでに何人かの人たちによって、回転縄紋発見のいきさつが想像をまじえて書かれている。たとえば、机の上にあったナイフの螺旋状の柄の部分を博士が無意識のうちに粘土の上に押しつけ乍ら回転させ、そこにあらわれた圧痕がヒントになったとか、あるいは研究に疲れた博士が立ち寄った喫茶店のカーテンの飾り紐がヒントなったのだとかいう話である。しかし、当の博士はそのようなことを語られることはまったくなかったらしいし、たださりげなく「偶然」に発見したと記されているだけである。〈中略〉ニコルソンの回転縄紋についての報告は、山内博士の「偶然」の発見よりも2年早いのです。博士がニコルソンの報告を読まれたことがあったかどうか。これも現在では謎に包まれてしまっているが、万一博士がそれをヒントを得たのであったにしても、その縄紋原体の研究の偉大さには、髪の毛ひと筋ほどの傷さえもつかないであろう。『日本先史土器の縄紋』は、日本考古学が世界に誇るべき劃期的な業績である。最後に私の希望を述べるならば、これをさらに英語に翻訳して出版して、ひろく欧米の考古学者に読ませるようにするのが、博士の学恩を受けた私たちの当然の責任であろうと思う。

資料４　芹沢長介の疑義

a．1978『縄文土器』日本の美術　第145号

芹沢長介は、これより二年前（1929）にアフリカのソコト族の土器に廻転施文の縄文のあることが雑誌『マン』に報告されているので、勉強家の山内は密かに読んでいてヒントを得たのではないかという嫌疑をかけている（『陶磁大系1、縄文』昭50）。私にはこれについてコメントする用意はない。

b．2018「小林先生に聞く・考古学の未来」日本文化財保護協会紀要　第２号

山内清男先生は東京大学の人類学教室におられたのです。３階です。３階に外国からの本もみんなそこに集まるのです。図書室があったから。その図書室に集まる外国からの本は全部山内清男が目を通すのです。他の誰もそんなことはしません。たぶん縄を転がす文様施文のことについては山内清男が縄文土器で発見しましたけれども、アフリカの部族が縄を転がしているというのは雑誌『マン』に出ていたのです。それを山内清男先生が見ているに決まっているのです。だから芹沢長介先生があれはそこからヒントを得たのではないかと。山内支持派は目の敵のようにして芹沢長介を叩きました。だけど私も冷静に考えるとその可能性は極めて高いと思っています。その状況証拠をお話しします。勝手に思いついたのではのではないのです。

山内清男をこの中にもご存じの方は何人かおられると思いますが、ものすごく出典だとかオリジナリティを大事にする人なのです。少しでも自分がお考えなっていると山内から教わった書いていないとものすごく攻撃するのです。他の人に対しても、誰がそう考えたのかと、引用文献についても厳しいのです。厳しいのだけれども山内清男先生がを見ていると、縄文土器の縄文の転がし方についてはひと言も触れていない。それは異常です。

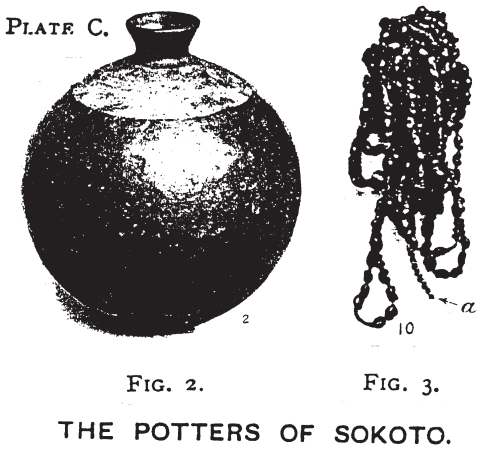
資料５　小林達雄の賛意

コルソン報告」が発見の動機となったとすれば、翌1930年５月に発表された「斜行縄紋に関する二三の観察」は、回転技法の斜行縄紋として衝撃的な内容となっていたに違いない〔山内 1930〕。恥ずかしいことであるが学生時代、この「斜行縄紋」の論文が回転施紋を前提とした詳細な観察と分類によるものだと誤解していた。そうでないことに、まずは驚かされたのである。戦後、小林行雄の『概説書』にも縄紋原体が判明した文献として、この「斜行縄紋」の論文を挙げている〔小林 1951〕。ことの本質は「W. E. ニコルソン報告」ではない。〝偶然の発見〟は必然であったのである。発見の動機を詮索するのではなく、重要なのは昭和６年、回転押捺が斜行縄紋の正体であ

Nicholson, W. E. “The Potters of Sokoto, N. Nigeria.” Man. No34, 1929

Decoration-A standard decoration is placed on every pot just below the neck for about 3 inches all round. Before the pot is guite dry, a piece of string doubled, twisted and knotted, in length about the breadth of hand (Plate C,Fig.3,10a),is rolled round the pot with the palm of the hand, and leaves more or less regulur impressions.

「標準的な装飾のすべては壺の頸部の直下約三インチのところを一周するようにつけられている。土器がまだすっかりかわかないうちに、一端の結び目にした手の幅ほどの長さの撚紐を土器の上において、手のひらでころがしてゆくと、おおよそ規則的な圧痕がのこされる」
〔芹沢 1975〕



資料６　「ニコルソン報告」の抜粋

ることを知った事実である。

塚田は芹沢への反論として、昭和６年の「発見の経緯」を補強するために縄紋発見に関わる草稿の一部を図示した（A1、A3）。このコピーは「参考資料として草稿類を山内清子氏から提供された」資料であり、山内が自宅に保管していた「縄紋」に関する草稿類の一部である。多量の草稿類は「博士論文」の編集ために、塚田のところに持ち出された。しかし編集者といえども、山内を擁護するためであれば勝手に草稿を公表してもよい道理はない。塚田の主張する「信義」にも、自らが違反しているのだ。山内が「昭和六年に発見」と述べている以上、未発表草稿を使ってまで補強する必要は何処にあるのであろうか。

５．『日本先史土器の縄紋』出版その後

編集者としての塚田は同時に在野の研究者として「考古学手帳」・「下総考古学」の中心的同人であった。しかし塚田の属する下総考古学研究会と山内先史考古学のめざす方向性は、相容れぬ方法論と党派性をもっている。多くの研究者もそのことを感じてとっていたに違いない。同じ在野といっても一括りにはできない、山内の対局には森本六爾もいるのだ。同人の一人武井則道は塚田が、山内の「業績に対して敵愾心をもってのぞんでいた」と証言している〔武井 1982〕。塚田自身も「弟子だとは思っていない」と言い放っている〔塚田 1980〕。もともと山内には高弟も弟子もいない、出入禁止はあっても破門などはない。山内が先史考古学の師であることに違いないが、そこに集う研究者も学生もみな対等な「１対１」の信頼関係で結ばれていただけである〔中村 1996〕。生前、山内と塚田との関係に違和を感じていた岡本は、その点を山内に強く問い糺したことがある。山内の答えは単に「著者と柏屋印刷所」の関係だと言い切られ、納得せざるを得なかったことを思い出す。いずれにしても、山内にとって『論文集』の自費出版は、経済的に理解ある柏屋印刷所の援助が必要であったのは確かである。

塚田の生前、「山内清男著『日本先史土器の縄紋』刊行の諸事情」と題する例会発表のメモが残されている［**資料７**］。その中の八項目の一つ「３．山内博士の講義ノート、学位論文のコピーの悪用例」があげられている。例会の発表内容は知る由もないが、解題した大村 裕の解説よれば、これらのコピーや原体復元写真が「古今伝授のような形で閉鎖的に伝えられ、一つの人脈が形成され」、「自己の系列下に組み込む手段として利用」された学界の体質を糺さねばならないという内容らしい〔大村 1993〕。それは山内の意図と係わり合いのない、山内を利用した側の問題である。

1980「山内清男著『日本先史土器の縄紋』刊行の諸事情」研究メモ No.168

昨年12月に上記の書を刊行しました。幸い好評で発行後間もなく品切れになりました。研究内容が重要である為とはいえ品切には手に入らなった人々から苦情がよせられました。しかし、逆に万一残本が多く出たとしたら‥‥‥と思うとぞっとします。とにかく、当事者になってみると、この１年間、正確には昨年６月３日から今日まで、予測をはるかに上まわった騒ぎの中に身をさらしていたことになります。この１年間をようやく落着いてふりかえってみる気になりましたので、以下に掲げる諸項目について、下総の例会に御報告し、日本考古学界のもう一つの側面あるいは裏面を御理解願いたいと思います。

1. 山内清男博士の遺された資料をめぐる諸氏の行動
2. 佐藤達夫氏没後の資料の処置
3. 山内博士の講義ノート、博士論文コピーの悪用例
4. 55年６月３日（編集開始）～ 12月10日（発行）の間の学界の動き
5. 例言の解説
6. 論文草稿類整理の情況と今後の見通し
7. 活字になった評価（主に論文）と活字にならない批評（塚田）。特に評論のカラクリについて
8. 下総の土器研究と山内考古学について

本来ならば当事者としての私は10年ぐらい沈黙を守るつもりでいましたが、最近の学会の動向を見ていると、白昼泥棒が大手をふって教育の現場で活動をしていたり、盗んだ研究を種に講演したり、はてには我々の仕事に全くいわれのない中傷をあびせかけています。学問がみだれているというより、みだれ切った学界の中に何人まともな人がいるか、それを数えた方が早いくらいだとさえ思います。下総の例会では、出来るだけ具体例をあげて説明するつもりです。その中には残念なことにかつての会員もは入っています。

資料７　塚田 光の「研究メモ」No168

では山内の博士論文を「悪用」するのではなく、「善用」であれば許されるのであろうか。前述したように『日本先史土器の縄紋』の編集のため、塚田のところに持ち出された

多量の草稿類はすべてコピーが撮られた。無断でコピーを撮ることなど憚れる、御法度であろう。それは学問以前、作法の問題である。コピーは編集作業のためにだけ許される行為である。ましてや大村がいうように、下総考古学研究会の「共同研究のために、コピーを作成し共有していた」となれば、善用どころか盗用である〔大村 2008、2014〕。危惧を感じた御遺族は草稿類の返還を求めたという。とんでもない仕儀である。

大村自身も「草稿は未公表」と断りながら、別の草稿（A2）の内容に言及している〔大村 2008、2014〕。「自己の系列下で山内の業績を占有的に利用」することなど言語道断、決して許される行為ではない。また、『日本先史土器の縄紋』編集時に草稿類の整理にあたった同人の武井でさえ、こうした「摘まみ食い」的な引用に憤慨し、旧知中村五郎を介して山内家に草稿類の出版を願い出たという。許可など下りるはずもない、本末転倒な話である。この出来事もつい最近、二年前に起きた後日談の一つである。

おわりに

最後に、『日本先史土器の縄紋』について、大村 裕は2008年「「縄紋博士」山内清男の仕事」のなかで、次のように要約している［資料８］。

１．山内が仮に東大の教授であったなら、英文要約付の『東京帝国大学理学部紀要』の一書として公費で出版され、日本はおろか世界にその業績は知られていたであろう。

２．しかし学歴の壁に阻まれ一講師のままで終わり、出版の機会は恵まれず自費による出版を余儀なくされた。そのため縄紋研究は停滞した。

３．そこで何の利害関係もない塚田 光の援助と尽力により刊行され、新しい世代の研究者の更に力強く発展する希望の光を与えた。

大村はこうした三文芝居の筋書きを作りあげ、「塚田光氏の陰の献身も学史の片隅に位置づけておきたい」と言

2008b「「縄紋博士」山内清男の仕事」『白門考古論叢』

山内博士が仮に東大の教授であったなら、「縄紋」の研究成果は『東京帝国大学理学部紀要』などという形で公費により出版され、そして語学力のある優秀なスッタフにより、巻末に英文梗概が付載されて、日本はおろか世界にその成果が広まっていったのではないかと思います．しかし、学歴の壁に阻まれてとうとう東大では一講師のまま終わってしまい、その成果の発表は独力で模索する以外に途はありませんでした。資金の提供者もなく、未公表資料という状態が長い期間続いたため、他の研究者による「縄紋」研究は停滞を続けたのでした。数奇な運命をたどったこの研究成果は、何の利害関係もない塚田光氏により日の光が当てられ、現在の新しい世代の人々によって更に力強く発展を見ております〈中略〉こうした研究の発展の基盤構築は、もちろん山内博士の功績によるものですが、塚田光氏の陰の献身も学史の片隅に位置づけておきたいと思っています。

資料８　大村 裕のまなざし

挙げしている。ややもすれば学歴という通俗的な「まなざし」を通して、「山内清男の仕事」を学史上に位置づけようとしている。果たして正しい学史的理解といえようか。山内が例え東大教授であろうとも、一講師、無職であったとしても、その生き様同様不変であり、自らの力量のなかで出版を目指したに違いない。それは『論文集』の方針をみても明らかであろう。山内を阻んでいたものは、決して「学歴」などではないはずである。鳥居龍蔵・梅原末治然り、同じ専科生でもその対局には、王道を歩んだ八幡一郎、第三の道を選んだ甲野 勇もいる。山内を取り巻く官学アカデミズムの権威・権力の構造と実体、社会・学界における「山内清男」の立ち位置、科学的な方法論、普遍・不動の振る舞いを総合的に究明してこそ学史というものである。

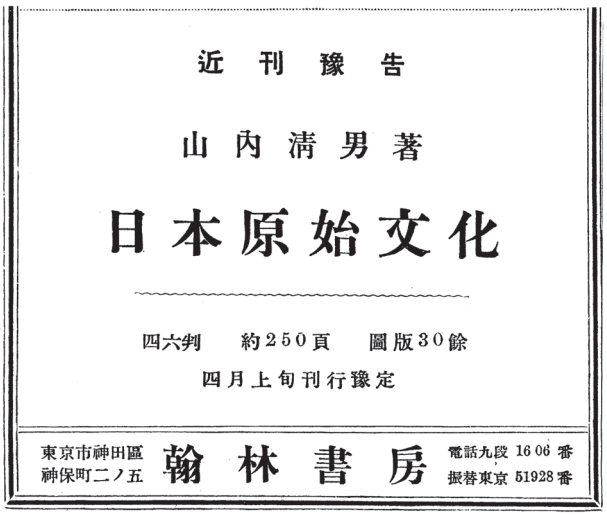
戦前、絶対的「天皇制」における皇国史観、その対極にある唯物史観の狭間で科学的精神で立ち向かい、先史考古学の方法を確立したのが山内の立ち位置である。また戦後、象徴「天皇制」下のおける民主化、それに反動するかのような右傾化。振り子のような情況のなかで山内のもつ科学性は「戦後左・右の盾」ともなった。戦前・戦後を一貫して如何なる困難に遭遇しようとも、山内の方針と清貧な姿勢は変わることのなかった。一方、戦後の山内への言挙げと同様、戦前の「国体」も和服からそっと洋装に衣替えして護持されていく。戦後、黒塗りされるべき「神武天皇」は、今日では紀元節とともに検定教科書に復活してきた。戦前・戦後の深淵とは何か。科学的な方法論で貫いた山内清男の仕事を振り返りながら、戦前・戦後をめぐる考古学の「反省と課題」は、再度、考え直す時期にきているのだ。

如上の事柄は、単に「山内原理主義者」の戯れ言で済まされる問題ではない。学史はつくられるものではなく、事実に基づいて語らなければならない。これが「ある学史の一断面」の真相である。

2021. 2. 21了／ 11. 23補

付　記　昨年の暮れ高橋龍三郎さんから「山内清男」展の図録用の原稿を、年が明けた２月、別に會津八一記念博物館紀要に掲載するシンポジウムの原稿を依頼された。すでに正月に書き上げていた一つの原稿を急遽、図録用に山内資料の顛末記「遺されしモノの想い」と紀要用に山内著作に関わる顛末記（「山内清男『論文集』・『博士論文』刊行とその後」）に二分して提出したのである。まだシンポジウムのレジュメには、「紀要」原稿の要旨と関連資料のみを載せておいた。当初の「紀要」原稿にシンポジウム発表内容と関連資料を加筆し、再度提出した次第である。

最後に今回、會津八一記念博物館の寄贈された「山内清男資料」が日本考古学共有の財産として、いち早く公開されることを改めて強く願う次第である。


近　刊　豫　告

山　内　清　男　著

日本原始文化

四六判　約250頁　圖版30餘

四月上旬刊行豫定

東京市神田區神保町二ノ五　翰　林　書　房　電話九段 1606 番　振替東京 51928 番

A「ミネルヴァ」創刊号　裏表紙広告

Ⅰ　内　　容

A．第一期十二輯には関東地方土器型式のうち次の；如きものが欠けて居ります。第二期に於てこれらを極力収載します。

縄紋式早期――三戸式，田戸下層式，田戸上層式，稲荷台式。

前期――花積下層式，黒浜式，諸磯Ｃ式。**中期**――阿玉台式。

後期――加曾利Ｂ式の一部，曾谷式。

弥生式――久ケ原式，その他。**古墳時代**――土師器数型式。

B．一期に収載した土器各型式の中でも，掲出した土器は甚少数に止まり，型式の全貌を明にするには尚多数の写真を必要とします。器形，装飾の重複しない限り，これらもなるべく収録したいと考えます。

Ⅱ　**体　　裁**　体裁は第一期と同じく，大いさ日本標準規格Ａ列５番，コロタイプ印刷，一輯図版十葉，解説付袋入とします。紙は時節柄従来のものが或は都合付きかねるかと思いますが，極力良質の紙を選定します。そのため紙質の不同を来すかも知れませんが，予め御承知置き願います。

Ⅲ　**刊行期日**　等二期の刊行は来る九月より開始します。第一期より号を追い，13輯を第一回とし，阿玉台式土器を収める筈です。第一期は刊行不規則に流れましたが，第二期は力めて一月一輯の割に発行したいと考えます。

B 日本先史土器図譜（第一部関東地方）第二期十二輯の刊行予定

参考文献

伊東信雄　1982「回想仙台の考古学」『仙台郷土研究』第６巻３号

大村　裕　1993a「ある学史の一断面」下総考古学13

1993b「『研究メモ』所載基礎資料（2）〈解題〉」下総考古学13

2008a『日本先史考古学史の基礎研究』六一書房

2008b「「縄紋博士」山内清男の仕事」『白門考古論叢』Ⅱ

2011『縄紋土器の型式と層位』六一書房

2014『日本先史考古学史講義』六一書房

近藤義郎　1964「戦後日本考古学の反省と課題」『日本考古学の諸問題』

甲野　勇　1953『縄文土器はなし』世界社

小林達雄　1978『縄文土器』日本の美術第145号　至文堂

2018「小林先生に聞く・考古学の未来」紀要第２号　日本文化財保護協会

小林行雄　1934「楕圓押捺文施文具」考古学第５巻10号

1951『日本考古学概説』創元社

斎藤　忠　1974「山内さんを憶う」『山内清男集』付録

酒詰仲男　1964『貝塚に学ぶ』学生社

佐藤達夫　1974『山内清男集』日本考古学選集21　築地書館

芹沢長介　1975『縄文』陶磁大系１　平凡社

1980「山内清男著『日本先史土器の縄紋』」考古学雑誌66－１

武井則道　1982「塚田氏の縄紋時代の集落と共同体研究について」『縄文時代の基礎研究』

塚田　光　1980a「山内清男著『日本先史土器の縄紋』刊行の諸事情」「下総考古学研究会研究メモ」No168

1980b「山内清男著『日本先史土器の縄紋』の新刊紹介（芹沢長介）を読んで」考古学雑誌66－３

中村五郎　1996「山内清男先生伝記資料」『画竜点睛』

山内清男　1925「磐城国三貫地貝塚発見土器の撚糸紋」人類学雑誌第40号２号

1930「斜行縄紋に関する二三の観察」史前学雑誌第２巻３号

1939『日本遠古之文化』補注付き新版［補注38］

1939～1941『日本先史土器図譜』

1964『日本原始美術』縄文土器　講談社

1979『日本先史土器の縄紋』

和島誠一　1955「発達の諸段階」『考古学講座』２　河出書房

Nicholson,W.E. 1929 “The Potters of Sokoto, N. Nigeria.” Man, No34, March